

「研究データ利活用協議会」公開シンポジウム 参加者アンケート分析

研究データ利活用協議会事務局

2020年12月2日開催の「研究データ利活用協議会」公開シンポジウムにおいて、参加者にアンケートを実施したので、その結果を以下に報告する。

<回答者について>

- ・ 参加者 53 人に対して、回答者数 22 人で、回答率は 41%であった。回答率は開催中止となった昨年度を除き例年 50%を超えていたが、今回は実会場でのアンケート配布では無くオンラインにて任意での回答としたため回答率が下がったものと思われる。
- ・ アンケート回答者のほとんどを大学もしくは公的機関所属者が占めており、うち研究者が 8 名、図書館員が 7 名、技術者が 4 名、事務職員が 1 名であった。

表 1 アンケート回答者の所属

	2020 年度		【参考】 2018 年度	
	人数	割合	人数	割合
大学	9 人	40%	15 人	28%
民間企業	1 人	5%	14 人	26%
公的研究機関	11 人	50%	16 人	30%
公的機関	1 人	5%	3 人	6%
その他	0 人	0%	5 人	9%
合計	22 人	100%	53 人	100%

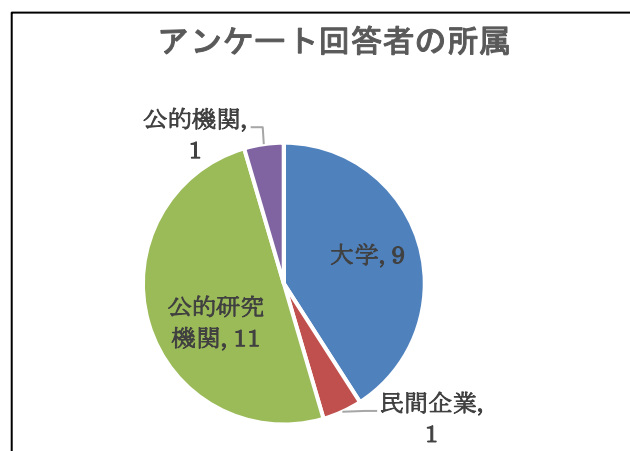
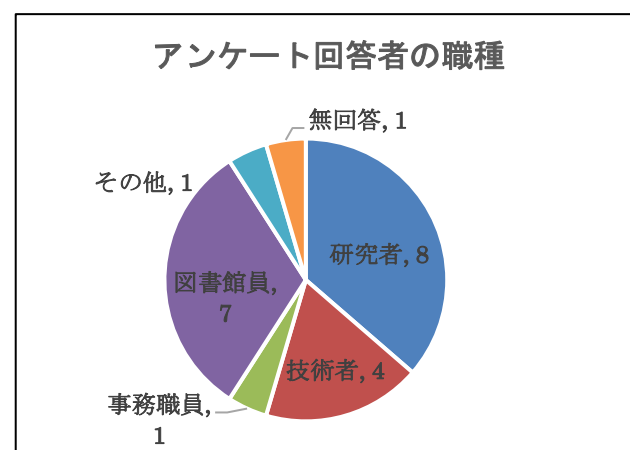


表 2 アンケート回答者の職種

	2020 年度		【参考】 2018 年度	
	人数	割合	人数	割合
研究者	8 人	36%	26 人	49%
技術者	4 人	18%	5 人	9%
事務職員	1 人	4%	8 人	15%
図書館員	7 人	32%	8 人	15%
その他	1 人	5%	5 人	9%
無回答	1 人	5%	1 人	2%
合計	22 人	100%	53 人	100%



<研究データについて>

1. 研究データの公開にどのような効果を期待について、複数回答可で尋ねた。結果は以下の通り。

表3 研究データ公開への期待（%は、全回答者数（2020年度:22人 2018年度:53人中の割合）

	2020年度		【参考】2018年度	
	件数	割合	件数	割合
研究成果の発展や実用化の進展	17件	77%	33件	62%
他分野を含む外部との融合や協働へつながること	17件	77%	35件	66%
研究の透明性や再現性の確保・証明	12件	55%	25件	47%
第三者に成果データが利用されることへの評価	14件	64%	20件	38%
過去のデータを使うことによる重複投資の防止	8件	36%	15件	28%

・ その他として下記の回答があげられた。

- 日本の研究の海外の研究者への可視化と国の垣根を超えた共同研究の可能性

表4 回答者所属ごとの回答数内訳

	大学 【9】	民間企業 【1】	公的研究機関 【11】	公的機関 【1】	その他 【0】
研究成果の発展や実用化の進展	8 (89%)	1 (100%)	7 (64%)	1 (100%)	-
他分野を含む外部との融合や協働へつながること	6 (67%)	1 (100%)	9 (82%)	1 (100%)	-
研究の透明性や再現性の確保・証明	4 (44%)	1 (100%)	6 (55%)	1 (100%)	-
第三者に成果データが利用されることへの評価	6 (67%)	0 (0%)	7 (64%)	1 (100%)	-
過去のデータを使うことによる重複投資の防止	3 (33%)	1 (100%)	3 (27%)	1 (100%)	-

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

表5 回答者職種ごとの回答数内訳

	研究者 【8】	技術者 【4】	事務職員 【1】	図書館員 【7】	その他 【1】
研究成果の発展や実用化の進展	5 (63%)	1 (25%)	1 (100%)	7 (100%)	1 (100%)
他分野を含む外部との融合や協働へつながること	7 (88%)	3 (75%)	1 (100%)	5 (71%)	1 (100%)
研究の透明性や再現性の確保・証明	5 (63%)	2 (50%)	1 (100%)	3 (43%)	1 (100%)
第三者に成果データが利用されることへの評価	6 (75%)	1 (25%)	1 (100%)	6 (86%)	0 (0%)
過去のデータを使うことによる重複投資の防止	2 (25%)	2 (50%)	1 (100%)	2 (29%)	1 (100%)

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

2. 研究データの公開に対して、どんな懸念を感じるかを複数回答可で尋ねた。結果は以下の通り。

表 6 研究データの公開への懸念点（％は、全回答者数（2020 年度:22 人, 2018 年度:53 人）中の割合）

	2020 年度		2018 年度	
	人数	割合	人数	割合
研究データを利用されても、評価につながらない。	11	50%	22	42%
研究データの利用許諾ルールが曖昧で、誰がいつ成果を利用しているか不明である。	13	59%	20	38%
研究データの公開に向けて、整理方法等が分かる人材がいない。	13	59%	25	47%
研究データを、保管・管理する場所がない。	7	32%	15	28%
研究データを公開するにあたって、公開準備をする時間が無い。	4	18%	10	19%
価値が高い研究データでも、適正価格で無く無料・安価で公開されてしまう。	2	9%	10	19%
研究データの公開により、競争が激化する。	1	5%	3	6%

- ・ その他として下記のような回答も挙げられた。
 - データ品質と利用者側の品位
 - 産業データカタログと研究データカタログの未整合

表 7 回答者所属ごとの回答数内訳

	大学 【9】	民間企業 【1】	公的研究機関 【11】	公的機関 【1】	その他 【0】
研究データを利用されても、評価につながらない。	4 (44%)	0 (0%)	6 (55%)	1 (100%)	-
研究データの利用許諾ルールが曖昧で、誰がいつ成果を利用しているか不明である。	3 (33%)	0 (0%)	9 (82%)	1 (100%)	-
研究データの公開に向けて、整理方法等が分かる人材がいない。	6 (67%)	0 (0%)	6 (55%)	1 (100%)	-
研究データを、保管・管理する場所がない。	3 (33%)	0 (0%)	4 (36%)	0 (0%)	-
研究データを公開するにあたって、公開準備をする時間が無い。	1 (11%)	0 (0%)	3 (27%)	0 (0%)	-
価値が高い研究データでも、適正価格で無く無料・安価で公開されてしまう。	2 (22%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	-
研究データの公開により、競争が激化する。	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	-

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

表 8 回答者職種ごとの回答数内訳

	研究者 【8】	技術者 【4】	事務職員 【1】	図書館員 【7】	その他 【1】
研究データを利用されても、評価につながらない。	4 (50%)	1 (25%)	1 (100%)	5 (72%)	0 (0%)
研究データの利用許諾ルールが曖昧で、誰がいつ成果を利用しているか不明である。	7 (88%)	1 (25%)	1 (100%)	4 (57%)	0 (0%)
研究データの公開に向けて、整理方法等が分かる人材がいない。	5 (63%)	2 (50%)	1 (100%)	5 (72%)	0 (0%)
研究データを、保管・管理する場所がない。	2 (25%)	3 (75%)	0 (0%)	2 (29%)	0 (0%)
研究データを公開するにあたって、公開準備をする時間が無い。	3 (38%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)
価値が高い研究データでも、適正価格で無く無料・安価で公開されてしまう。	1 (13%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)
研究データの公開により、競争が激化する。	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (14%)	0 (0%)

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

3. 研究データの引用を活性化するために、どのような取り組みが必要か尋ねた。結果は以下の通り。

表 9 研究データの引用を活性化するための取り組み (%は、全回答者数 (22 人) 中の割合)

懸念点	回答数	割合
研究データの引用、被引用関係が把握できる仕組み	15	68%
メタデータの作成を支援するツール	9	41%
研究データの保管場所の確保	9	41%
研究データの質や信頼性を担保する仕組み	14	64%
研究データが引用された際に評価される仕組み	13	59%
研究データの権利関係を明確にする仕組み	10	45%

・ その他として下記回答も挙げられた。

➤ 多少不完全でも研究者がデータを公開できる環境

表 10 回答者所属ごとの回答数内訳

	大学 【9】	民間企業 【1】	公的研究機関 【11】	公的機関 【1】	その他 【0】
研究データの引用、被引用関係が把握できる仕組み	6 (67%)	1 (100%)	7 (64%)	1 (100%)	-
メタデータの作成を支援するツール	5 (56%)	0 (0%)	4 (36%)	0 (0%)	-
研究データの保管場所の確保	4 (44%)	0 (0%)	5 (45%)	0 (0%)	-
研究データの質や信頼性を担保する仕組み	4 (44%)	1 (100%)	8 (73%)	1 (100%)	-
研究データが引用された際に評価される仕組み	6 (67%)	1 (100%)	6 (55%)	0 (0%)	-
研究データの権利関係を明確にする仕組み	3 (33%)	0 (0%)	6 (55%)	1 (100%)	-

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

表 11 回答者職種ごとの回答数内訳

	研究者 【8】	技術者 【4】	事務職員 【1】	図書館員 【7】	その他 【1】
研究データの引用、被引用関係が把握できる仕組み	3 (38%)	3 (75%)	1 (100%)	7 (100%)	1 (100%)
メタデータの作成を支援するツール	3 (38%)	2 (50%)	0 (0%)	4 (57%)	0 (0%)
研究データの保管場所の確保	4 (50%)	3 (75%)	0 (0%)	2 (29%)	0 (0%)
研究データの質や信頼性を担保する仕組み	6 (75%)	3 (75%)	1 (100%)	3 (43%)	1 (100%)
研究データが引用された際に評価される仕組み	4 (50%)	1 (25%)	0 (0%)	7 (100%)	1 (100%)
研究データの権利関係を明確にする仕組み	5 (63%)	1 (25%)	1 (100%)	3 (43%)	0 (0%)

【】回答者数

(%) 当該属性の回答者中の割合

<今後の「研究データ利活用協議会」>

- ・ 今後、「研究データ利活用協議会」で取り組むべきテーマ等について以下のような意見・コメントがあった。
 - データに関わる人材について、データ利活用推進について
- ・ 今後の開催形式について訪ねたところ、下記の結果となった。

表 12 今後の開催形式についての回答

今後の開催形式について	回答者数
今後もオンライン形式での開催を希望	11人
状況が許せば実会場での開催を希望	3人
オンライン・実会場の両方での開催を希望	8人
計	22人

<その他>

その他、今回のシンポジウムや JaLC の活動について、以下のような意見・コメントがあった。

- ブレイクアウトセッションは、どちらも大変興味深く、パラレルセッションではなく、どちらにも参加できる時間設定にしていただけるとありがたいです。
- オンライン開催のご準備ありがとうございました。オンライン開催の難しさはあると思うのですが、これまで出席しづらかった地方や海外の方も出席されていたのではと思います。
- Face to Face と同等の効果を得るのは難しくても、オンライン開催が RDUF の裾野を広げる一つの方法として捉えることができると感じました。
- 海外在住なので、オンラインで開催していただいたことで、初めて参加できました。ありがとうございます。今後もオンライン形式での開催を希望、と書きましたが、RDUF は日本の方々のためにあるとおもうので、日本の方のご意見を優先して考えていただけたらと思います。
- このような集まりがあることはデータ利活用にかかわるコミュニティにとって重要だと考えています。
- イノベーションを起こすにはデータ提供者にとっては想定外の産業利用が必要なので、ライセンスには提供者を免責する条項が要となる。

以上